

俳句 大津俳句会

朝蟬の一通な声に目覚めけり

井芹眞一郎

音立てて蜻蛉のくぐる風の壁

秋山 恵子

阿蘇の山引き裂くこころはたた神

市原 初女

梅雨明けの起伏眩しき大阿蘇野

江藤 みち

雷も時々鳴って通夜の客

大塚喜久子

満水の湖のさざなみ風薫る

坂本 セキ

夕涼し刻を忘れて友と会ふ

佐賀 久子

絵手紙に友の描きぬ半復生

田中ひと美

甘えたき思ひに墓を洗ひあし

原田 順子

鹿の子の足跡あまた里の畑

堀川 妙子

更衣窓も簞笥も開け放ち

武藤 規子

草取り女生えくる草に追ひつかず

渡邊佳代子

俳句 つのはな句会

村雨に友だち五人棄てて来た

星永 文夫

蜘蛛の囿と混線している憂い事

志賀 孝子

不器用が私のとりえ蓼の花

田上 公代

こめかみに戦後史つんとかき氷

木庭 杏子

理科室に青い六月閉じ込める

上杉 波

北欧の海鳴り白く夏に入る

矢嶋 道子

一人居の耳にささやく細い風

水野 春子

はなしのぶ咲いてその先青い空

梅木トキエ

梅酒きらり思いはさらり今日ひとり

塚本 洋子

非常灯の男はみどり喜雨の夜

酒井 豊美

短歌 大津短歌会

早春の空の青さよ日だまりに

吾と猫とのひと時がある

吉永 恵子

青空に輝る銀翼見つめつつ

回想したり亡夫との旅路

豊岡ミツル

早苗田の水面にうる雲揺らし

梅雨の晴間を風わりゆく

岩下 文代

梅雨晴間かがやき見せし紫陽花の

月影に見む花の愛しさ

小平 善行

忘れいし君若き日の横顔を

思い出したり大学祭に

渡辺佐代子

短歌 万年青短歌会

明け近くホトトギス鳴く美咲野は

早朝出勤の人らせわしき

山内 信子

京言葉書きつらねたる湯呑持つ

男孫がくれこ土産の一つ

中山 春代

軒端より落ちし仔雀拾い持ち

仔を呼ぶ親にそつと放てり

磯崎テル子

日日ふくらむ百合の蕾に亡友想う

絵手紙の筆のふくいとして

大林 律

ホトトギスの初音長すみわたり

梅雨の用意はよいかと鳴くか

合志 妙子

段畑の蜜柑に真白き花は満ち

車を降りてしばし香に酔う

合志 桃花